

日本プロレタリア小説集
1

蔵原惟人編／新日本出版社

日本プロレタリア小説集 1

1964年3月25日 第2版

定価 380 円

編 者 蔵 原 惟 人

発 行 者 松 宮 龍 起

東京都千代田区富士見町2の7

発 行 所 株 式 会 社 新 日 本 出 版

電話東京(262)47 番
振替番号東京136 番

落丁・乱丁がありましたらお取替 ます

凡例

- 一、収録作品はできるかぎり、著者及び権者の指定するものによつて校合した。いくつかの作品については、新たに著者が手を加えた。
- 二、仮名づかいはおおむね新仮名に改め、伏字も可能なかぎり復原した。
- 三、難読と思われる文字には新たにルビを付した。

まえがき

今年はちようどナツプ（全日本無産者芸術連盟）創立三十五周年にあたっている。この年を記念してこの「日本プロレタリア小説集」は出版される。

ナツプの創立によってその最盛期をむかえたプロレタリア芸術運動は、わが国の革命的民主主義文学の歴史のなかで大きな足跡を残し、数々のすぐれた作品を生んだ。最近色々の意味で戦前のプロレタリア文学・芸術運動への関心が高まっているが、広い範囲の読者には、中野重治、小林多喜二、宮本百合子その他二、三の有名な作家のもの以外は、かならずしもその作品を手にすることが容易ではない。現在一部にナツプを中心とするプロレタリア芸術運動について誤った評価が流布されているが、一般の読者はそれをその実作によって検証する手段をもたない状態にある。

この時期のすぐれた作品は現在でも十分に芸術的鑑賞にたえるものであり、当時のわが国革命運動のなかで、高い思想性と芸術性を統一した作品として、革命的民主主義文学の新しい発展のために、その伝統を生かす意義は小さくない。かつてひろい人民大衆に読まれ、その生活の糧となり、そのたたかいを激励したこれらの作品は、民族の独立と平和と民主主義のためにたたかっている現在の読者にも感銘をあたえるであろう。

この小説集は三冊にわかれ、一九二三年から一九四〇年にいたる二十六篇の短篇、中篇を収録している。作家と作品はナツプ所屬の有無をとわず、当時一定の役割をはたしたものをなるべく広く集めることにした。ただ現在、反革命的、反民主主義的な立場に立っている二、三の作家の作品は、これを除外している。もちろん戦前のプロレタリア文学の代表的作家と代表的作品とはここに収録されるものに尽きるわけではない。私たちはまた時期を見てその続編を出してゆきたいと考えている。

私たちはこれらの作品が、新しい文学を志向する人々、とくに若い読者にひろく読まれることを期待している。

一九六三年十一月

蔵原惟人

目次

まえがき	蔵原 惟人	2
脱走者	藤森 成吉	7
地獄	金子 洋文	35
幽霊読者	山田清三郎	69
馬	徳永 直	81
セメント樽の中の手紙	葉山 嘉樹	87
櫛	黒島 伝治	91
棺と赤旗	橋本 英吉	107
キヤラメル工場から	佐多 稲子	121

線路工夫	山内謙吾	133
十姉妹	山本勝治	145
朽ちゆく望楼	間宮茂輔	163
鉄の話	中野重治	197
鉄	岩藤雪夫	211
労働日記と靴	鹿地亘	277
嵐に抗して	木村良夫	295
解題	小林茂夫	315

「日本プロレタリア小説集」(全三卷)

第二卷収録作品

小林多喜二「東俱知安行」

手塚英孝「虱」

黒江勇「省電車掌」

谷口善太郎「綿」

鈴木清「監房細胞」

第三卷収録作品

江馬修「本郷村善九郎」

本庄陸男「白い壁」

江口漁「人生の入り口」

宮本百合子「小祝の一家」

壺井栄「廊下」

小池富美子「煉瓦女工」

脱走者

藤森 成吉

1

列車は、北海道の曠野を野獸のように疾走していた。

三等の函のなかには、オレンジ色の電燈の光をあびて、かなり混んでいる乗客が、或は時々ころげ落ちそうに眠ったり、或はねられないままに、懶おろそそうにガヤガヤ話をしたりしていた。深い陰影と倦怠な空気が、全体を奇怪な倉庫のような感じにして見せた。

それはまだ真ッ暗だった、昼間見たら、さぞいんな曠野や沼や森や耕地やらがつづいているだろうと想像されるように汽車は、その闇のなかを絶えず音の調子を交

えながら駛はつた、ある時はざわざわと木の葉の騒ぐ声をひびかせながら、ある時は大きな洞のなかをでも通るように遠い反響を起しながら、また或る時は、しっかりとした大地の唸り声をわき立たせながら――。

が、その真ッ暗な空のなかに、東の方角とおもわれるあたりに、丁度眼と同じくらいな高さに、ほんの一すじ白くほそい帯が出来ていた、それは、まがいもなく今日の夜明けを告げようとする、東雲しののめの第一線だった……。

その前晚十一時二十分発の汽車で室蘭を立った私は、真夜中の二時すぎに青森港へ着いて、三時半の汽車でそこから函館へ向っていた、函館着は五時半だった、汽船のなかで少しうとうとしたばかりの私は、まだひどく睡ねむ

たかッた、大勢の乗客のあいだに挟まれて、私は時々眼をあげたりつぶつたりしていた、眼をあげて窓のそとを見ると、そのたんびに空は少しずつ明るくなった。ほそい東雲の筋がだんだん幅広くなり、ほの白い色がはつきりと濃さを増した、やがてもう一つの筋がうまれ、空はどんよりと臉まぶたをあげ、その卵の白味のような反映が野へひろがって、黒い木や草の影がほのぼのと幽霊のように硝子戸ガラコへ映って来た。

「実際、わッしゃアいのちがけで逃げ出して来たんです、あすこにいて死ぬ位なら、いっそ一足でも逃げ出して死にてエと思つて……」

「ふむ、だがよく逃げ出せたもんだね、君アまったく運がよかつたんだよ」

その時ふと、そう言う声が私の耳へひびいてきた、私は思わず顔を正面へ向けた。

「そうかも知れませんが、一べん逃げたら、もうあとアまづ殺されるか逃げ了おぼせるかの二つより外アねえんです、誰でも、逃げる者アみんなその覚悟です、——ついわッしの逃げる少し前にも、一人逃げそこなつてつかまつた男がりましたがその男なぞは、見せしめに両腕をぎり

ぎり荒縄でひつくくられて、小屋の梁はりへ一日じゅう宙に釣りさげられていました、少しばかりならばだが、一日だからかないませんや、身体じゅうの血がみんな足の方へさがつちまつて、胸からうえの方が飄ひょうたん箆たんのように青しよびれて、その代り、両脚アまるで象か熊の足みたいにでく、でくにふくれあがつて、てんで人間だか何だかわけのわからねえ物になつちまいました、氣絶すると、又ひきおろして息を吹ッ返させてぶらさげるんです、そうして、どんなに泣こうが頼もうが、幹部の奴等ア耳にも入れねえでただせせら笑つてるきりです」

「見せしめにするッて言うなら、無論その位な事アやりかねないだろう、まだ君の見た奴なんざあやさしい方さ、僕の前聞いた話なんかは、君、もつとズツとすごいもんだ、何でも逃げそくなつた奴を天井から逆さにぶらさげて、下の土間でどんだん唐がらしや松葉を焚たいていぶすんだそうだ、逆さんなつて血がみんな頭の方へ行つてるやつをやられるんだから、その苦しみッたらとても堪たつたもんじゃないうさ、むせて咳せくどころか、おしまいにや息がつまつて、鼻からも口からも眼からも血がどんどん、出て来るんだそうだ、そうして氣絶すると、今君の

言つたようにおろして正気づかせて、また何遍でも、死ぬまでやるんだそうだ」

中折れをかぶつて、茶の格子の背広を着た、色の白い、若い会社員が銀行員のような恰好をした男は相手の言葉のうわ手に自分の知識をほこるように言つた。

「へえ、そんなことをやる処もあるんですか」

相手の男はおどろかさされたように、一寸気まずそうに口ごもつた。

「あるとも、いや、もっとひどい実例も僕ア聞いているよ」

若い男は更に得意になつておツかぶせた。

正面の——丁度私と同じように窓ぎわへ倚りかかつた、その会社員みたような男と並んだ男の顔を、私は眼をこらして眺めた。

それは若い男とちがつて、顔も手も足も真黒な、大がらな、三十七八の土方体の男だった、眼を病んででもいるのか、その濃い眉のしたには、黄ろい色のセルロイド縁のトンボ眼鏡がかかつていた、夏とは言いながら、彼は少しよごれ味を帯びた白地の浴衣をひっかけて、その下へは鼠色のシャツを、上へはごりごりした木綿縮の袖

無しの短い上ツ張りを着ていた、どこかの古物屋でも仕入れて来たかと思われる黒い釜形の帽子が、やや深く彼の大きな頭をかくしていた。

「そうですか、全く監獄部屋たアよくくツつけたもんです、いや、わッしやまだ監獄へは一廻も喰い込んだ事アありませんが、人の話によると、監獄の方がどの位らくだか知れねえそうです、部屋に比べりやア、食物だつて取り扱いだつて、労働だつて、ほんものの方はまるで子供ごっこ見たようなもんだ、とかつてことです、何しろ、今お話したように、毎日朝は二時ツて言やア否応なしに叩き起して、それから午後の七時まで、まるで休みなしに牛馬のように働きづめに働かされるんですから。——一寸でも腰をのばして休もうとでもしようもんなら、すぐ檜の角棒で、どんとぶつたたかれるんです。飯休みなんてツたつて……飯は四度食わせますが、……せいぜい五六分位なものです、それも大いそぎで、立ちながら掻ッ込むんです、だから始終腹が減つて、腹が減つてどうにも仕様がねえんです、そこい持つて、労働は激しいでしょう、今アもう、山の木は大低伐つちまつてありますから、わッし達の仕事つて言うなアおもに

崖崩しや穴埋めですが、どうかすると向うの崖とこつちの崖とのあいだへかけた細い板のうえを、相棒と二人で土や石をうんともつたもつこを担いで、日になんべんも渡らせられるんです、何しろ疲れちゃアいる、眼はまわる、そうやって、足をすべらして、深い谷へ落っこつて死んだ者ア、今まで何人あるか知りやアしません、その時の気もちなんてッたら、実際今かんがえてもわッしやアぞつとしますア」

男はやや低い声で、が、感情に迫られたような力のこもつた調子で言った。

「で、君は一たい何年間の契約をしたんだね」
若い男はたずねた。

「何年なんてんじやありません、ただ、四、五、六、七と、四ヶ月間の契約をしたんです、周旋屋の話じやア、それだけでもどうして大した金儲けが出来るような口ぶりだったんです、前金だけでも、一人前八十円ずつ渡す、あつちへ着きゃア、毎日三円や四円は遊んででもくれる、そのうえ働きようによつちやアいくらでも割増しをつける、何しろまだまだで新開地のことだから、少し仕事は荒ッぽい代り、金の入ることア面白えようなも

んだ、なんてえうまい口上だったんです、魔がさしたつて言うか、わッしやアついそいつに乗つちまつたんです、自分ばかりか、そう言う事ならつてんで、周旋屋がわりに知り合いをあつちこつち説き廻つて、仲間を四五人も作つたんです、……だから、余計くやしくつて仕様がねえんです、周旋屋の方じやア、——わッしの知り合いの男ですが、——わッしが本気になって奔走しているあいだ、こいつアいい椋鳥がかかったと思つて、さぞ赤い舌を出してペロペロ笑つていやがかつたろうと思つたね、……が、さてすつかり支度が出来て、いざ立つつてえ段になつてみると、八十円はおるか旅費だけやつと位ツぎり呉れりやアしねえんです、どうしたわけだつてきくと、その中から手数料や雑費を差し引いて、あと残つた二十四五円の金は、四ヶ月全部つとめたあかつきに手渡しする筈だつてえんです、そう言われても、わッしやアまだ気がつかなくつたんです、なるほどそれもそうか、と思つて、わッし達ア半分は北海道見物でもするつもりでこつちへやつて来ました。

ところが見物どころか、まるで軍隊の輸送のように、どこをどう通つたかも皆目わからずに蘆川の奥まで連れ

て行かれて、それから夢にも思わなかったような、さつきお話ししたような労働をやらせられたんです、賃金だつて、一日たった一円四五十銭でさあ、それも毎日払いながらともかく、悉皆月末払いと来ています、そのうえ、飯場代は差し引かれる、あと酒の少しでも飲もうものなら、一月働いたつて鑑一文の金も残りやアしません、じゃアみづとり、なんか飲まなけりやアいい、ツて仰やるかも知れねえが、何しろ一日じゅうのひどい労働を済ませて帰つてくりやア、身体はもう縮のようにへとへとです、ほかに何のたのしみがあるわけじゃアなし、酒でも飲まなけりやア、とても身体も精神もつぎやアしません、こんなつもりじゃアなかった、周旋屋の契約とすつかりちがう、なんてねじ込んで行つたつて、向うの方じやア、言いがあつたら周旋屋に言え、おれの方はそんな泣き言の相手は出来ねえ、の一点張りでさあ」

「どこの周旋屋だつて、飯場だつて、人夫の募集はみんなそうさ、そうでも言わなけりやア、誰が北海道くだりの山奥まで出かけて行くもんか、それッ位の事ア、今あ子供だつてみんな知ってるよ、君は生き馬の眼を抜くツて言う、江戸のまんなかに育ちながら、またどうし

て、そんな古手に引ツかかったものだね」

若い男は冷然とした、明かに軽蔑的な口調で言った。

「そう言われちゃア面目ねえが……」

土方風の男は、ひどく情けさせられたように口を嚙んだ。

「言わば、うまうまだまされた方が馬鹿、ツて言うもんさ、要するにだまされ損だね、然し君に取つちア、これも仲々いい経験だアね。」

「……………」

「それに君、君……や君達の仲間の人夫にやア、なるほど気の毒な事だが、仮りに立場を変えて政府や飯場の身にもなつて見たまえ、こいつア、どうもある点までア、やむを得ないと僕ア思うね、その、今まで君の働いていた鉄道工事はかりじゃアなく、北海道全部の鉄道つて言う鉄道が、言わばみんなそう言う君達のような犠牲で出来あがつたもんさ、今僕等の乗っているこの汽車の下にだつて、今まで幾人の人間が誰も知らずに死んで腐つてるかわかりアしない、然しそのおかげで、言わば今日僕達がこうやって自由に旅行も出来りやア、又この後ますます便利にもなつて行けようツてもんさ、気の毒は

気の毒だが、そうかって、それが可哀そうだから静かにやっ行ってこう、なんて言っていた日にヤア、いつまで経ったって工事も捗らなけりヤア、従って僕達がこうやってらしくに旅行することも出来ず、思うように文化的生活をするわけにも行かなくなるって言うわけさ、だから、政府でもそんな監獄部屋のことなんぞ知らない筈はないんだが、言わば見て見ぬふりをしているわけさ、もし一々洗い立てていた日にヤア、それこそ始末がつかなくなるからね、小さな苦情を言やアきりもないが、然し大きな国家生活って言う見地から考えりヤア、一個人の不平等なものにやあ捲かれろ、って言う諺があるが、一人の不幸が反って大ぜいの利益になるってわかっている以上は」

若い男は、あだかも自分が当路の国務大臣かのように、そうして議会へ向って答弁しているように、滔々として論じた。

「だが、政府はほんとうにそんなふうを考えているんでしようか。」

大きな土方体の男は熱心にあざねた。

「そう考えているだろうさ、そうでなけりヤア、今ま

で長いあいだあやあって、監獄部屋制度をそのままにしておくって訳がなからうじヤアないか」

「実際です、実は、わっしヤア今まで不思議でならなかったことがあるんです、って言うなア、憲兵や巡査が時々様子を見廻りに飯場へやっ来て来るんですが、いつでも、まるで子供のように意気地なく追い返されちまうんです、なかにや割合忠実な巡査がいて、わざわざわっし達の仲間をよんで待遇はどうだ、なんてきいてくれますが、そんな時にヤア、大抵幹部がくっついていゝるんです、あとでどんな目に遭わせられるか、と思つたら、その恐ろしい人間のそばで、誰がほんとの事なんか巡査へ向って言うもんですか、又付いていないにしても、しゃべつたらすぐ巡査が連れて行って、どこか確かなところで自分を保護してくれることでもわかっているなら兎もかく、そうでなかつたら、とても思い切つてしゃべれつてが、ないじヤアありませんか……」。

だが、わっしの不審だつて言うなアその事じヤアありませぬ、たとえ実際どうしようと思つたところで、荒くれた鬼のような大勢の幹部を向うへ廻しちヤア、二人や三人の巡査や憲兵に何の手出しも出来ないことアわか

りすぎるほどわかつてますが、然し、もし政府がほんとうに監獄部屋を潰そうと思つたら——いや、潰さねえまでも改めようと思つたら、何とか出来ねえ管あねえとわつしゃア考えるんです、何てツたつて、政府よりも大きな力ア日本にやアねえ管ですからね、それじゃあまるで政府が知らずにいるかと、わつしゃア思つても見ましたが、わつし見たいな馬鹿なら兎もかく、政府があればだけの大がかりの組織を知らねえわけアねえでしょう」

「そんな事ア考えるだけ幼稚だ、勿論黙認さ、政府はただ大局へ目をつけていさえすりやアいいんだ、所謂国利民福さね、僕がたとえは当局になつたところで、それより外にやアやつぱりやりようがないと思ふね、……もし反対に、僕自身が君達のような境遇にでもされたら、そりやアちよいとたまらないがね、ハハハハハ、然し、そう言う人達は、言わばそれが自分の不運だと思つてあきらめるが第一さ、人間、みんな運不運があり、お互いに犠牲を払つて生きているんだ、それに君なんぞの場合には、たしかに君の迂濶くわくだつた罪も手伝つてゐるんだからね」

「いや、わつしゃア初めツから、こうなつたなア自分

のせいだと思つてます、わつしだけなら兎もかく、何しろわつしゃア仲間まで引ツ張り出したんですから……」

土方の男は、また梢しほげ返つたようにだまつた。

その時、そとはますます明るくなつていた、——多分雨だろうと疑われた陰鬱な暗い空は、あけてみると一体のうす曇りだつた、北海道特有のガスが少しかかつているらしく、夏の朝とは思えないような、毛をむいたあとの鳥の肌のような寒い青白さが、電燈の消えた車室のなかへ一杯に浸み込んで来た、いつか窓のそとの家の数が増して、不機嫌そうな色の屋根や壁や、無言にそよいでいるポプラの姿やらが、あとからあとから硝子の上へ現われて来た。

「さア、函館へつくぞ」

「洋傘を忘れねえように持つて！」

乗客達は、がやがやとみんなは下車の準備をし出した。

「もう函館ですか」

土方の男は、急にびっくりしたように背広にきいた。

「ああ、今度さ、……函館はよく知つていないかね」

「知つてゐるにもいねえにも、……四月にただ素通り

したッきりですから」

男は黒い厚い荒れた唇をゆがめて苦笑した。

「じゃア、仕事を見つかるなんてッても一寸困るね、それに今ア不景気だし、——まアゆっくり探して見たまえ」

背広の男は、しきりに白い麻のハンケチで額や鼻の煤煙をふき取ったり、ぼたぼたと洋服のひだのごみを払ったりしながら言った。

「はア——」

土方男は、ひどく不安をつのられて来たように、ぼんやり背広の男の動作を眺めた。

如何にも走り疲れたような鈍い汽笛の叫びをあげながら、見る見る列車は速度をゆるめた。

「じゃア、旦那はこの七時半の連絡船でお帰りですか」

車がとまりかけた時、土方の男は思いついたように再びきいた。

「そう、——大分はやくて困ったな、停車場に待っていてもつまらなし、どこかへ行って休んで一つ飯でも食おう」

背広の男はひとり言のように呟いた。

「旦那、何なら鞆を持ちましょうか」

洋傘（さし）と毛布の包みを片手に持ち、片手にかなり大きな赤革の手提げ鞆を持って立ちあがった彼を見て土方の男はいきなり両手を鞆にかけた。

「ありがとう、なに構わんよ、少し位おもったくたつてどうせそこまでだから」

背広の男は鷹揚（おろろ）にこわった。

「でも、どうせわっしアア手があいているんですから

……」

「なに、結構々々、君にお願いする位なら、僕ア赤帽にたのむんだけれどね」

かさねて追っかけるようにする、土方の男を、背広の男はそっけなくふり切って、汽車のそとへ出て行った。

土方の男はひどくバツを悪くしたように周囲を一寸見まわして、それからがっかりしたように首を垂れて、黙り込んで、その丈けの高い大きな身体をプラットホームへ運んで行った、が、とほとほと構外へあるき出したと、思うと、又途方にくれたように立ちどまった。

「君！」